

# 丸系八つ頭種芋確保のための未利用芋の活用

高収益畑作担当 石田 紘子

## (1) はじめに

「丸系八つ頭」の生産者は、自家採種により種芋を確保しています。当センターでは、20g以上の子芋・孫芋を種芋とすることを推奨していますが、気象条件などにより、必要な量を確保できず、作付けに支障が出る場合があります。

これまでの結果から、10～20gの種芋を直植えしても収量が確保できることがわかっていますが、今回は緊急的に種芋の確保が必要な場合を想定し、これまで利用されていない親芋、極小芋の種芋活用技術を検討したので紹介します。

## (2) 研究内容

### ア 育苗による極小芋の利用について

極小芋（2g）と20gの芋をポット育苗し比較したところ、極小芋については出芽が遅れました（図1、2018年）。

極小芋ポット苗を、20gの芋の直植え（以降、慣行）と比較すると、生育量や親芋重はやや小さくなりますが、M級（500g）以上の芋が8割以上確保できました（表1、2019年）。また、次作の種芋として使う分球芋（20～59g）は、10.8個/株と慣行と同等に確保できました（表2、2019年）。

### イ 親芋などを分割した育苗について

親芋や子芋を分割し（写真1）、ポット育苗すると、出芽率が低くなりました（図1、2018年）。

親芋を分割・育苗し栽培した結果、親芋重は30g分割苗で慣行に比べやや大きく、10g分割苗では慣行に比べやや小さくなったものの、M級以上の芋個数の割合は10g分割苗が30g分割苗を上回りました（表1、2019年）。分球芋については、種芋として利用できる20～59gの個数が、30g分割苗では13.8個/株と慣行よりも上回り、10g分割苗では8.5個/株とやや少なくなりました（表2、2019年）。

### ウ まとめ

極小芋や分割芋は、親芋がやや小さくなる傾向にあるものの、概ねM級以上の芋が確保でき利用可能と考えられます。ただし、これらの利用は、出芽率が低く、生育が遅れるため、その対策として育苗期に加温した場合、資材費が148,000円/10a、労賃は芋分割を含め91,000円/10aの費用が発生するため緊急的に種芋を確保する場合の技術であると考えられます。

## (3) 今後に向けて

上記の他、種芋確保に向けた栽植様式や栽培管理法等について検討しています。成果としてとりまとめ、今後も情報提供を行っていきます。



写真 1.  
親芋の分割片 (30 g)

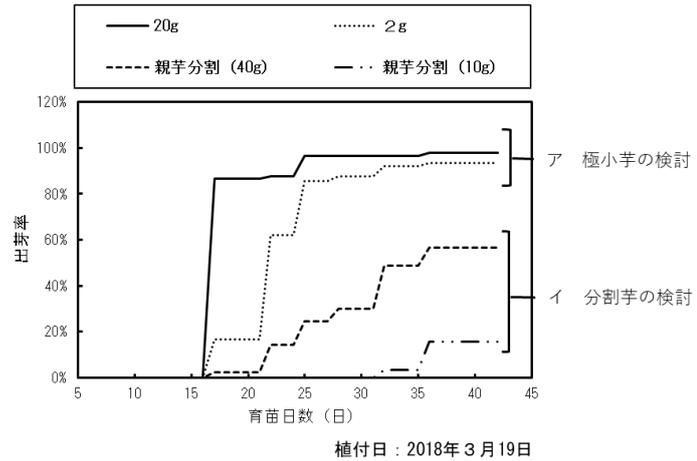


図 1. ポット育苗時の出芽率 (2018 年)

表 1. 親芋の収量および品質 (2019 年)

処理区	収量 (kg/10a)	1個重 (g)	品質 格付割合(個数%)				形状		
			2L	L・M	B	外	直径 (mm)	長さ (mm)	長/径
対照20-30g種芋	2122	1146.0	50.0	50.0	0.0	0.0	131.3	161.0	1.23
極小芋の苗	1844	996.0	16.7	66.7	0.0	16.7	123.2	136.5*	1.11*
30g分割苗	2249	1214.7	50.0	0.0	50.0	0.0	122.0	161.8	1.33*
10g分割苗	1731	935.0	0.0	83.3	16.7	0.0	112.3*	144.0*	1.28

注) \*はDunnnett法(両側)による検定で対照区と5%水準で有意差があることを示し、\*の無いものは有意差無しを示す。

表 2. 分球芋の収量および品質 (2019 年)

処理	全収量 (kg/10a)	重量別個数 (個/株)				計
		60g以上	20~59g	10~19g	9g以下	
慣行	1451.7	3.2	9.3	13.7	29.0	55.2
極小芋の苗	1343.2	2.8	10.8	12.8	19.7 *	46.2
30g分割苗	1628.2	3.0	13.8	14.7	27.5	59.0
10g分割苗	1230.4	2.5	8.5	14.3	23.5	48.8

注) 子芋、孫芋、ひ孫芋の合計(玄孫は無し)の各区調査3株、2反復の平均値。  
\*はDunnnett法(両側)による検定で慣行区と5%水準で有意差があることを示し、\*のないものは有意差なしを示す。